
白い雪と紅い華

薔薇の棘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い雪と紅い華

【コード】

N0680K

【作者名】

薔薇の棘

【あらすじ】

朝、起きたら母親が死んでいた

起きたら母親が死んでいた

といつても私が殺したのではないようだ

眠っているようだが肌の冷たさと色白さがそうではない事を物語っている

外を見ると雪がしんしんと降っている

私は灰色のワンピースみたいなパジャマのまま裸足で外へ出た

「いつてきます」

ただそれだけを言って家を去った

まずは近所の幼馴染へ行った

徒歩1分もかからない所にある

彼も死んでいた。まるで寝ているかのように

次は一番仲のいいあの娘のところ

40分間私は歩いた。歩いて歩いてやっと着いた

なぜか彼女も死んでいるという確固たる確信があった

そのまま鍵のかかっているはずの玄関のドアを開けて私が知らないはずの彼女の部屋へ迷うことなく行く事が出来た

彼女もやはり死んでいた

いつもの元気に輝いていた瞳は今まぶたの中に隠れてしまっている

無性にその眼を抉りたいと思った

けれどそれは止めた勿体無いものね

そこに嵌まってこそその眼は輝くんだから

私は彼女のお気に入りだった懐中時計を彼女のバックから抜き出した

チツチツチツチツ

私もこの時計の時を刻む音が好きだった

「じゃあ、これ賣っていくから」

彼女が聞いたらきつと怒るであろう台詞をいって彼女の家を出た

いろんな人の家に行った

何件も何十件もこんなに沢山の家の場所を私は知っていたのだろうか

結局みんな死んでいた

彼女の懐中時計は11時30分を指している

雪はまだ止む気配がない

そういえば足から血が出ている

私の通ったところが紅く道のようになっていた

何故かそれがとても嬉しくて私は嗤った晒って笑って晒って笑って
嗤って

くすくすくすくすきやははははははははは

ねえ良いって言ってっ？

「良いよ、ずっと一緒に居てもいいよ」

ありがとう

本当にありがとう

ずっと一緒だよ

ずっと一緒だよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680k/>

白い雪と紅い華

2010年10月28日07時54分発行